

〔書評・紹介〕

国立国語研究所著

## 『幼児の語彙能力』

前田富祺

### 一

国立国語研究所では、昭和四十二年から三か年計画で、特別研究「就学前児童の言語能力に関する全国調査」を行なったという。就学前児童（幼稚園児）の言語能力については、これまでもいろいろな調査が行なわれている。特に言語心理学的な研究は、近年いろいろな方法によって著しく進められているようである。そのような状況の中で、このように一定の方法に基づいた調査を全国的規模で行なったというところにまずその意義を認めることができよう。この調査の成果は、先に、『幼児の読み書き能力』（国立国語研究所報告45）、『幼児の文法能力』（国立国語研究所報告58）として、あいついで公表されてきた。このたびの『幼児の語彙能力』は、『国立国語研究所報告66』として、それらに続くものとして公刊されたわけである。『幼児の読み書き能力』も『幼児の文法能力』も、それぞれに幼児の言語能力の実態を明らかにすることを目指すものであったが、本書はこれまで研究の遅れていた幼児の語彙の研究<sup>注1</sup>において一つの方法を確立することを試みたものである。

語彙能力に限られる問題ではないが、言語能力というものをどのような面からどのようにして測定するのかということは難しい問題である。幼児の言語を研究する場合にも、心理学的には、発達心理学的に、もしくは学習心理学的に研究するという立場があるが、それぞれに一定の方法が確立しているというわけではなく、いろいろな方法による研究が試みられている段階であると言えよう。いろいろな方法でも、単に形として現れた言語だけをとりあげるといことをせず、そのような言語を表現している幼児自体の問題を考え、そのような言語を表現させているまわりの様々な要因を考えようとしていることは明らかである。これに対して、言語学、国語学で言語を考える時には、出来るかぎり言語を包むまわりの様々なるものを対象として、言語それ自体だけを考えようとする傾向が強かった。言語学的、国語学的立場で考える時に、そのような切り捨て方の困難な幼児言語の研究が取り上げにくいものであったことは当然のことと思われる。現在の幼児言語研究においてもっとも広い見直しを持つ心理学者の一人であると思われる村田孝次が、その著『幼稚園期の言語発達』の「結び」の中で、「言語学は言語についての因果的法則

を探究する学問ではなく、言語的な事象（反応）間の関係を客観的に精査し、それらのあいだの関係を法則化することをめざす学問である。」と定義したのはもっともなことであった。しかし、そのような言語学、国語学の禁欲主義にあきたらない者も多いことは認めておかねばならない。国立国語研究所を中心とする言語生活の研究も三十年を越える歴史を積み重ねてきているし、言語社会学や言語心理学というものも言語学の中に取り込もうとする動きもある。語彙の研究などは、特に外的言語学をも合わせ考えて進めなければならぬ分野だと考えられる。国語語彙史において法則としての歴史を考えるというのは、村田孝次が言語学の研究から外された「言語についての因果的法則を探究する」ということに他ならない。細かな問題を捨象して言えば、言語史の研究も言語発達の研究も変化（発達）の研究であるという点で共通しているはずである。ただ、言語能力と言い、言語発達と言う場合には、単に実態を明らかにするということとどめず、それを何らかの位置に位置づけようとする立場が表明されているように思うのである。早くから方言研究における生活語の研究の重要性を主張されてきた藤原与一が、『幼児の言語表現能力の発達』という御著書を最近出されたことも思い起こされるのである。

前書きが長くなってしまったが、『幼児の語彙能力』という書名を見て、それならば国語学の問題ではないと考える読者のあることを恐れるのである。本調査の計画立案、実施は国立国語研究所国語教育研究室の村石昭三、天野清を中心となされたと言ふ。また、本書の執筆は村石昭三によると言ふ。村石昭三、天野清ともに言語発達の研究者であり、ここに示されている調査の方法や整理の仕方

はこれまでの国語学で一般に行なわれてきた国語語彙の研究手法とはいくらか異なる形をなしているように思うのである。しかし、ここでとられている研究方法についてはいろいろな考え方があり、しかも、同様な調査を行なって比較することのできる一つの規準を示したというところに大きな意味があるものと考えている。本書は、幼児の語彙の研究の一つの方法を確立したものであり、本書の成果は、実態の一面を明らかにしたということとともに、その結果を取捨しさらに研究を進めるための基礎データを作ったことにあるように思うのである。本書は数表を並べた部分が大きな部分を占めており、読んで理解するというよりは資料として使うという面を持っているのである。私の希望するのは、このような研究を、それぞれの立場から批評し語彙研究の中に位置づけてほしい、国語学の問題ではないと排除してはもらいたくない、ということである。私が本書の紹介を引受けて特に述べたいことは以上に尽きる。幼児の言語の評価にかかわる問題は国語教育の分野に、発達にかかわる問題は心理学などと切り捨てて、瘦せ細って純粋な国語学を守ろうとせず、考えてほしい課題の一つがここにもあるということを言いたいのである。

## 二

本書の内容をやや離れた私の思い入れはさておいて、本書の目次を示して（横書きを縦書きにする）紹介の責を果しておこう。

### 第一章 調査の概要

第一節「就学前児童の言語能力に関する全国調査」について

第二節 調査経過の概要 1 昭和四三年度就学前児童の言語能力に関する全国調査 2 昭和四四年度就学前児童の言語能力に関する全国調査

第三節 「就学前児童の語彙力調査」について 1 理解の水準 2 言語の系

第二章 調査の実施手続き

第一節 性状語調査 1 調査の概要 2 本テストの構成 3 性状語テストの構成 4 テストの方法 5 正誤の判定基準と記録のとり方 6 各テストの実施要領 7 記録用紙

第二節 時間・空間語調査 1 調査の概要 2 本テストの構成 3 時間・空間語テストの構成 4 テストの方法 5 正誤の判定基準と記録のとり方 6 各テストの実施要領 7 記録用紙

第三節 動詞調査 1 調査の概要 2 動詞テストの調査地域と人数配分 3 テスト語彙(動詞) 4 テストの構成 5 テストの方法 6 正誤の判定基準と記録のとり方 7 各テストの実施要領 8 記録用紙

第四節 言語生活アンケート調査

第五節 被験者と特性

第三章 反応の判定基準

第一節 性状語 第二節 時間・空間語 第三節 動詞

第四章 結果と考察

第一節 性状語テスト 1 対語テスト 2 発語テスト 3 基準反応率・系反応率一覧表 4 パラメーターの分離テスト 5 系列化テスト 6 結果に対する考察

第二節 時間・空間語テスト 1 対語テスト 2 発語テスト

3 基準反応率・系反応率一覧表 4 位置変換(前・後ろ)テスト 5 時間判断(前・過ぎ)テスト 6 時間判断(けさ・ゆうべ・今夜)テスト 7 時間判断(過去・未来)テスト 8 時間判断(遠・近)テスト 9 結果に対する考察

第三節 動詞テスト 1 対語テスト 2 対文テスト 3 対絵テスト 4 テストの順序効果 5 結果に対する考察 6 基準反応率・系反応率一覧表

第五章 語彙能力と諸要因との関係

第一節 性状語能力と諸要因

第二節 時間・空間語能力の諸要因

第三節 動詞能力と諸要因 1 地域 2 クラス年齢 3 性

4 生活年齢

第四節 結果に対する考察

第六章 まとめ

付録資料

1 性状語テスト(手びき)

2 性状語テスト(絵図・用具)

3 時間・空間語テスト(絵図・用具)

4 動詞テスト(絵図)

5 被験者の特性(アンケート調査)

6 系の成立(図表)

以上、本書の構成を目次に従ってやや詳細に示してみた。最初、それぞれの内容についていくらか説明を加えてみたのであるが、それでは枚数をとりすぎることがわかった。このような示し方では

かりにくいところもあるかもしれないが、どういう研究をどういう手順で行ないまよめようとしているかということは、これによって伺い知ることができよう。

本書は、どのような調査票によって、どのような絵図・用具を使って、どのような手順で調査し、どのように記録・整理してきたかということを中心に記しているのである。このようなやり方は心理学などの方面ではよく行なわれていることかもしれない。しかし、本書は心理学的な研究を目指しているというわけではないのである。国語学や言語学においても、目的によって仮説を立て、その仮説を検証するための調査方法を考え、それによって行なった調査の結果を考察し、さらに仮説を立て直してゆくというような方法の考えられることはあるが、その点では本書の方法は参照すべき例の一つとなろう。本書によって明らかにされた実態ということもそれに参照されるべきであるが、このような調査方法ということ自体が評価され批判されなければならないものと考ええる。

### 三

このように一定の手順に従って調査をし、整理してゆくという方法は、多くの調査者による全国規模の研究ではとらねばならない方法である。もちろんそのような方法の持つ長所も考えられるし、短所もあげられる。全国といっても、ここでは、東京・京都・岩手・宮城・和歌山の五地点が選ばれている。しかも、A 範疇化、B 性状語、C 時間・空間語、D 意味分化、の四つの問題のすべてを行なったのは東京のみで、東北ではA Bのみ、近畿ではC Dのみしか行なっていない。一定の期間、一定の人数で調査を完了するためには、

そのように限定することは止むをえないことであつたかもしれない。しかし、このように限定した場合でも十分であつたかどうかということについては問題もある。ただ、本書では調査の手順が明確に示されているわけであり、同様な調査をいろいろな地点で行つてみることによつて、比較対照しながら本書では不十分だったところを補つてゆけるはずである。本書はそのような点で一つの規準として役に立つものである。

先に示した本書の内容を見るとわかるように、本書が語彙というまとまりを重視していることは確かである。個別の語を一つ一つ取上げていつているのではなく、語彙体系とまでは言えないにしても、語と語とのかわりを考えながら調査してゆくこととしているのである。言語の系というものを、A 単語・単語の系、B 単語・事物の系、C 事物・事物の系の三つに分けて考えているのである。これに従つて、実際に行なうテストとして、対語テスト——単語と単語との対関係の理解の水準を調べるテスト、対文テスト——簡単な文脈の中で、単語と単語との対関係の理解の水準を調べるテスト、発語テスト——簡単な事物（絵）を呈示し、対語の事物関係との理解の水準を調べるテスト、誘発（誘導発語）テスト——簡単な事物（絵）と、対語の一方を呈示し、残る一方を誘発して事物関係との理解の水準を調べるテスト、認知テスト——対語の一方を呈示し、それが意味する事物（絵）の理解の水準を調べるテスト、の五つが考えられたわけである。ここにおいては、語と語との意味的な関係の中でも特に対義語の関係が重視されているのである。

性状語、時間・空間語などという限定の仕方は、意味分野とも言えるものであるが、その中で特に対義語的な関係が目立ったものを

中心に取上げてきているわけである。それらにおいても語彙の体系を考える立場からは気になるところがないわけではないが、動詞とどのような限定の場合にはかなり曖昧な点が残るように思う。語と語とのかわり(対義語的な関係のものをも含めて)を考える場合にまず付録資料6に示された「系の成立」の図を考えるべきであろう。

その「系の成立」の全体を眺めてみても、動詞には問題の残るものが多いように思われる。本書の研究の目的が幼児の語彙体系を考えるというものではない以上省かれても当然とも言えようが、私の個人的関心から言えば、この「系の成立」というものこそ語彙体系を考える手がかりとなるもので、そのような視点からもさらに研究を進めてはしなかったように思うのである。

そのような語彙の体系ということを考えようとする立場からみると、このような調査の場合に、語彙の体系と表現の体系ということを区別しておく必要があるように思う。調査に対する答えとして出てくるものをそのまま重視してゆくとすれば、答えには語のレベルのものと表現のレベルのものがあることが問題となる。調査に対する答えは、一語で出てくる場合と、いくつもの語の組み合わせさせた表現として出てくる場合とがあるはずである。特に本書で問題にしている「ない」の付いた形をどう位置づけるかは大きな問題である。「ない」の付いた形は対義語とは言えないが、表現の体系の中では対応する形であることは確かである。幼児にとつて、「ない」が付くということがどのように意識されているかを考えておく必要があるであろう。この他の場合でも、複合語や慣用句的な表現が一つのものとなっているのかさらに分けられるのかは、幼児の意識に戻って考える必要がある。

#### 四

本書の訂正表には、「本文および表中の $x^2$ 、 $x^2$ は $x^2$ に訂正する。」とあった。この他に私の気のついた誤植には次のようなものがあった。

129 p	第4章 結果と考察	誤正
132 p	全被験者に対するアンケート	誤→被
263 p	結果に対する考察	誤→察
435 p	S・A・N	A→U

いずれもすぐ気のつくようなものであり、全体としては誤植は少ないように思われた。

#### 五

いずれにしても、本書の評価というものは調査の方法が適切であったか、このようにして示された調査結果がどのように利用されるかによって決ってくるものであり、今後同様な調査がもっと広く行なわれることを期待するのである。地域的にも、年齢的にも、同様な調査が行なわれてきた場合に、より適切な方法が提案されることになろう。その点では、本書は出発点なのであって、結果なのではない。そして、本書は少なくともそのような調査を行なう場合の一つの規準として使いうるものであることは認められるべきである。

この調査によって何が言えるかということになると、第五章の「語彙能力と諸要因との関係」が注目される。ここでは、地域差、

性差、年齢差などについて、有意差の認められるものと認められないものとの明らかなりにしている。ここで有意差の認められなかったものの中には、同様な調査を範囲を広げて繰り返すことによって有意差の認められるものもあるはずであり、今後調べるべき問題を提起していることになる。また、本書の全体については、第六章の「まとめ」を見ると、どういう調査方法によって、どういうことがわかったか、今後に残された課題は何かが示されている。幼児の語彙に関心を持つ者は、まずこの章だけでも読んでほしい。用語や考え方などかならずしもこの章だけでわかるとは言えない部分もあるが、語彙の研究についての新しい視点を知ることができるものと思う。

著者の意図されたこと、読者の読みとられるべきことを外れる点もあるが、御許しを願いたい。

注1 拙論「幼児の語彙の発達——人のよび方を中心として——」（国語学研究14）参照。

注2 拙論「数詞語彙史をめぐって」（『国語語彙史の研究』二）参照。

（国立国語研究所報告66 昭和五十五年三月三十日発行 東京書籍刊 B5判 五一四頁 八〇〇〇円）

——大阪大学助教授——